

— 翻 訳 —

P. B. シェリー作「キリスト教について」

上 野 和 廣

A Japanese Translation of P. B. Shelley's 'On Christianity'

Kazuhiro UENO

要 旨

1817年の作と言われている未完の散文、「キリスト教について」の翻訳である。キリスト教に関する問題は、シェリーの詩作の原点の一つであるが、彼の詩は非常に抽象的で捉えどころのない作品が多いため、詩作品から彼の思想を辿ることは非常にむずかしい。しかし、散文ではある程度自分の考えをまとめて書いているので理解しやすい。そこで、今回はキリスト教に関する彼の考え方をもっとも包括的にまとめた散文、「キリスト教について」を翻訳し、彼の詩作品解説の手がかりとした。

キーワード：イエス・キリスト Jesus Christ, 神 God,
伝記作者たち biographers,
宇宙を支配する力 the ruling Power of the Universe,
復讐 revenge, 心の純粋な者 the pure in heart,
人類の平等 equality of mankind, 真実と正義 truth and justice

人類の考え方や運命に最も忘れがたい方法で影響を及ぼした存在は、イエス・キリストである。今日、彼の名は、人類2億人の信仰心と結びついている。世界中で最も文明化された地域の制度は、彼の教えを承認することによって権威を得ており、ある程度、彼の教えの「精神」を備えている。彼は、私たちが一般に信じている宗教の神になっている。彼の非凡な「才能」、前例のない教義の急速な広まり、常に変わらぬ優さと慈悲深さ、信奉者が彼に寄せる献身的な愛、こうしたものが彼を神聖な存在として認めさせることになったと考えられる。この素晴らしい人物の伝記作者たちが後に、彼の生涯のあらゆる段階で超自然的な出来事が起こったと主張したことで、彼を神とする説ができあがった。例えば、彼が死んだ時、大変不思議な事がいくつも起こったと言われている。真昼の太陽を隠す真っ暗闇が地上をおおい、死体が墓場から起き上がり天下の公道を歩き、地震が町を揺さぶり驚愕させ、周辺の山々の岩が割れた。¹⁾ 哲学者は、改革者の死にこうした出来事を利用したり、また出来事そのものを、「宇宙の牧神」

の到来に結びつけるかもしれない。

* * * * *

イエス・キリストが神のような存在か否かをめぐる論争（もし議論の余地があると考えられる場合には）について、私はどのようなものであれ速断を下すことには異議を唱える。彼の性格や生涯に関する奇跡的な事や不思議な事をすべて取り去ると、十分に解明すべきひとつのテーマが残る。

イエス・キリストの教えの注目すべき影響として、直弟子たちの中に多くの伝記作者を生んだことが挙げられる。彼らは、イエス・キリストの才能、美德、苦悩、死について普通考えられない物語を熱心に記録した。後世まで残ったのは、その内のわずか四つであり、いずれの物語も最も重要な細部については一致している。どれもわかりやすい話で、自然で、十分に起こりうるもので、心を動かす真理に満ちている。どの宗教でも、どの革命でも、最も重要な細部については、似たような一連の出来事が起きている。つまり、あふれる才能と律儀な美德の持ち主が、压制や不正、迷信に対して断固たる態度で臨み、命を落とすのである。その人物は、許すことを拒み軽蔑する。そして、体を焦がす炎や压制者の横柄な嘲りを喜んで受ける。大衆が彼の頭上に投げかける嘲りや罵りは、彼にとってはどのような勝利よりも価値ある勝利である。なぜなら、彼の心は、測り知れないほどの大衆への愛で満ちており、彼に苦痛をもたらした熱意はとて純粋で激しいものなので、彼に向けられた憎悪でさえ甘美に感じてしまうのである。——人間の心にとってきわめて大切なもの、人間の心のあり方の中で最も甘美な慰めをもたらすものは、自己犠牲の意識である。ただ、この点で、イエス・キリストの伝記が、人類の記録の中で飛び抜けているわけではない。人類が彼に尊敬を寄せるのは、単に、神か人間かをめぐる論争の対象になるほどの偉業の主だからではない。同胞のために貢献できると思えるものに自らを喜んで捧げる多くの殉教者や愛国者たちと、イエスが根本的に違うところは、彼の教義には深い叡智と幅広い道徳性が備わっている点である。——

キリストが生まれたのは、人類の進歩において最も重要で忘れてはならない重大局面を迎えた時代であった。ローマという名の栄光、ローマという強国の生き生きとした精神は、すでに消え去っていた。権力の卑劣な篡奪者たちが、この世の支配権を握り、奴隷制という最も賤しい術策の犠牲の上に権力を得ていた。自由とヒロイズムに関する感情は、それらを感じたり影響を受けたりした者の嘆きという形でしか、生き残っていなかった。だが、こうした人たちからも、その感情はすぐに消えていった。富と権力が、異常なまでに蓄積された。最も軽蔑されるべき人間、自由人、宦官、宮廷を取り巻く様々な家臣たちに、使い切れないほどの富が与えられるようになった。この制度が引き起こした結果は、すぐに明らかになり、原因であるものの有害な性質と正確に一致した。洗練された芸術や文学とは、人々に慈悲深さや真理を教えることが本来の目的であるが、それが歪められ、低俗な欲望を満たし快楽を与えるだけのものになった。人類のあらゆるコミュニケーションの手段が、その根本において損なわれ汚された。

共和国の繁栄のために、無私無欲の注意を向ける人はもういなくなった。人と人の関係は、暴君と奴隷の関係となってしまった。奴隷は従属の代償として個人的利益を要求した。一方、暴君の方も優位に立つ特権として個人的利益を要求した。利己主義が組織化され、細かく段階が定められ、それを評価する者がごくわずかでも不利益を被らないようにバランスがとられた。また、知的探究をする人は、すぐに自己犠牲を必要とする状況に追い込まれるので、官能的喜びの追求が人類の関心事になった。こうして、世論が機能しなくなったため、社会的地位が一番高い人たちは、欲望と感情の最も怪物的で複雑な悪行を平気で行うようになった。まず、愛国心がなくなり、次に家庭的愛情が消え去った。人間は、獲物を求める猛獣のように同胞の間をうろつき、蛇が持つ恐ろしい敵意や悪意、さらに蛇にまさる狡猾さを身につけるようになった。

その一方で、間接的ではあるが人類の進歩に好ましい効果が、同じ原因から生じた。善と悪は深く結びついているので、人間に関する事で、善と悪のどちらか一方しか含まないものなど、ほとんどないと言える。ローマの文明化された世界に対する支配権は、本質的に非道なものであった。その支配権は、一連の侵略によって手に入れたものであり、残忍な独裁によって維持されてきたものである。ローマやギリシャ共和国の国家宗教は、ローマが国家としての性格や特権を失うことで消滅してしまった。自由民の儀式や制度と結びついた宗教だったので、結びつきがなくなると、国家宗教を支えてきた（空白）を失った。ローマの多神教は、とりわけ人々を熱狂的にすることもなく、大衆の信仰心にこたえ、人間の精神と分かちがたい「宇宙」の神秘に関する好奇心を満足させていた。この体制化された信仰は、共和国の崩壊の瞬間から衰えはじめ、世界への影響力も徐々になくしていった。信仰が消滅すると、信仰と密接に結びついた重要な道德秩序も崩壊した。愛国主義的なすばらしい献身、軍事的名誉を求める競争、つまり、スカエヴォラ、デキウス親子やレグルス²⁾が行った偉業の数々は、人類の進歩のために、必要な場面で果たすべき役割を演じ貢献していたのである。そのため、新しくよりの確な社会的義務に関する理念が、影響力の衰えた解釈に取って代わるべき時が来ていた。かつての社会的義務に関する理念は、それが作られた目的や意図が分からなくなった後も存続し、ただ存続し続けたことで権威を得ていた。厳格な哲学者たちが倫理学の主題をめぐって思索を重ねたおかげで、革命の期が熟していた。特に、ストア哲学者は、栄光、復讐、個人の勇気といった世間に支持されてきた迷信を激しく攻撃し、叡智と美德をはっきり示すものとして、魂の内なる尊厳と神聖さの重要性を主張していた。エピクロス主義者は、同じ意見を別の言葉を用いて述べた。懐疑論者は、人間のあらゆる知識の基盤をつぶさに調べ、体系的な思索と心の独立を考え出したが、ローマ的な美德を実践するために必要な熱烈な賛同を得られなかった。その一方、ある衝動は、

* * * * *

神

「神」という言葉で、人が心に思い描くものは、人の心そのものと同じくらい様々であると考えられる。ストア哲学者、プラトン主義者、エピクロス主義者、多神教徒、二元論者、三位一体説信奉者は、神の意味の解釈において、限りなく異なっている。いずれの人たちも、「神」は最も恐れ多く尊敬すべき名であるという点では一致しており、「神」という言葉を、目に見えない世界の神秘や、威厳、力のすべてを表現するために考え出された共通語と見なしている。そして、それぞれの学派は、この名前の使い方について他の学派とは異なる概念を持っているだけでなく、たとえ同じ学派内であっても、それぞれ自由な判断力を行使し、率直な気持ちで目に見える世界の影響力に自らを委ねており、完全な意見の一致をみる人は二人としない。イエス・キリストは、「神」という言葉をどのような意味で用いたのか尋ねてみたい。

この問題に関して、イエスは同国人の意見を取り入れていたと考えられる。人は誰でも、若い頃に信じていた宗教によって、情緒的な部分の多くが育まれる。イエス・キリストは、おそらく真理を求める熱意あふれる思いで、自国の年代記編者たちの研究を行った。その人たちはきっと彼の幼い頃の仲間であり、若い頃の瞑想の食べ物、栄養、材料になっていた。彼の想像力は、「ヨブ記」という題の崇高で劇的な詩を読むことで、人間の心と物質的世界が作り出す自由奔放な比喩的表現に慣れ親しむようになっていた。「伝道の書」は、若い希望で輝く彼の精神の骨格の上に、真剣さと厳かさをばらまき、耳を傾ける彼の心に次の言葉を届けた

あの静かで 悲しい人間性の音楽

不快であったり 耳障りでだったりすることもなく 十分な力を持ち

鍛え 抑制するもの。³⁾

「神」という名前は冒涇され、曲解され、目に余るほど忌まわしい犯罪を正当化するために使われたと、イエスは考えた。「神」は、人とも人の心とも違う、何か普遍的な存在であるという信念を、彼の教義の中で明確に辿ることができる。——イエス・キリストによると、「神」は、地上に雨を降らすジュピターでもなく、すべての生き物を造るヴィーナスでもなく、地球上の火の要素を統括するヴァルカンでもなく、太陽や月、星の中に奉られた光を守るヴェスタでもない。「神」は、物質界のプロテウスでも牧神でもない。そうではなくて、「神」という言葉は、イエス・キリストの解釈によると、これらの名称が含むすべての属性を統合したもので、存在する物の輪の中に含まれるあらゆるエネルギーや知恵を持ち、混ざり合い支配する「精神」のことである。ここで指摘しておきたい重要な事は、キリスト教の創始者が、宇宙を支配する「力」に関して、大衆のひどい想像力が産み出す概念とはまったく違う概念を持っていたことである。彼はいろいろな所で、この力を、物事の枠組みの中で神秘的に無限に充満しているも

のと表現している。彼の教義が理論的に否定する説を、彼の教義が含んでいることなど実際ありえない。例えば、彼の教義の中で、「神」が無限で捉えようのない神秘的な存在であると同時に、情熱に振り回される存在で（空白）であるなどとは表現されていない。

* * * * *

心の純粋な者は祝福されよ、なぜなら彼は「神」を見るから⁴⁾——内なる魂の神聖さを保つ者、密かに欺かない者、考えている事と行う事が一致する者、自分の考えや考え方を常に意識する者、心の中を過ぎゆくすべての事を裁く法廷において忠実かつ誠実な証人である者は、祝福されよ。こうした者たちは、「神」を見ることになるであろう。何と！死後に、彼らの目覚めた目が「天の王」を見るというのだろうか。「天の王」が座る黄金の椅子の前に畏れながら立ち、父なる「君主」の尊敬すべき表情を見つめるというのか。これが美德と純粋さの報酬というのか。こんな話は、空想家のつまらない夢であり、詐欺師の有害な説明である。知恵を生み出す素材を使って、自分たちの愚かでいじけた考えを隠すマントを作っているだけである。イエス・キリストは、最も優れた哲学者が感じて表現したことのみ語った——美德はそれ自体が報酬であると。彼が使ったこのような表現は、天才のエネルギーによって刺激され、（空白）詩人のあふれる情熱の賜物であったことは確かである。しかし、それに劣らず文字通り確かなことは、大衆の間違った概念と明らかに矛盾していることである。——言われてきたことだが、すべての詩人や哲学者がああ神秘的な原理のことを熟考したように、イエス・キリストは「神」のことを熟考した。この崇めるべき言葉は、精神と物質の世界で集められたエネルギーに満ちた、すべてを支配する「精神」を表現するものだと、彼は考えた。そのため、素朴で誠実な心が、真の知識や真の幸福を得るための必須条件であると断言した。やさしさと純粋さが習慣になっている人は、あらゆる思考の過程で、あらゆる思考の対象の中に、その人を取り囲む目に見えないエネルギーの恵み深い訪れに気づくはずであると断言した。贅沢と放蕩に汚染されていない人は誰でも、野原や森へ出かけて行って、春の息吹を吸い込み、楽しく元気を回復し、秋の香や音に触れては、孤独な心をかき乱す神々しく最も甘美な悲しみを味わうのである。詐欺師や、仲間を破滅させる者、うそつき、お世辞屋、殺人者でない人は誰でも、人々の間を歩き、美しさや尊厳を持つ人たちと交わり、「普遍的な神」との何らかの交わりを持つことができる。心の内に確固たる自信を持ち続ける人、心に浮かぶ想像の産物を調べ判断しようとする人、自分の中の神的部分が考案し認めるものになろうとしたり憧れたりする人は、……すでに「神」を見ている。

私たちは生き、動き、考える。しかし、自分自身の起源や存在の創造者ではない。また、複雑な性質のあらゆる動きの決定者でもなく、自分の想像力や精神状態の変化を操る者でもない……私たちはある力に取り囲まれている。それはちょうど空中に動かぬ琴が吊るされていて、その力が気まぐれに息を吹きかけて、静かな弦を訪れるようなものである。私たちの中で最も威厳があり素晴らしい特質というのは、それを土台にして人間性の尊厳と力とか聳え立つもの

であるが、その仕組みの下位の部分に較べると、能動的であり権威を持っている。しかし、この特質も、もっと高くさらに強い「力」に対しては受動的な奴隷に過ぎない。この力とは、「神」である。「神」を見たことのある者は、より純粹で完璧な性質になる時期になると、普遍的な存在の息がその者の体の上を通り過ぎる時、自らの意志で調和させ、見事に同調することで、最も神聖な調べを奏でる。

心の清らかな者は神を見るときと、美德はそれ自身が報酬であるときとは、同じ主張であると思われる。前者の主張は、後者の比喩的な繰り返しに過ぎない。教義を文字通りに解釈する者たちは、彼らが尊敬すると語る教祖の教義にとって、最も有害な敵であった。彼らは主張する、

* * * * *

ツキディデスは、特にこのような意見を確立するために計画された数多くの例を呈示する：

さまざまな人が行った発言について、戦争を始める時やすでに始めている時、実際に話された言葉を厳密に思い出すことは難しい。聞いた当人の私にとっても、さまざまな情報源から私に報告してくれた人たちにとっても同様である。それゆえ、発言のなされ方というものは、私が思うに、何人かの話し手が問題になっている話題について、その場に最も適した所感を述べるという形をとるものである。しかし、同時に、実際に話された内容の全体的な意味にも私はできるだけこだわりたい。

タキトゥスによれば、「ユダヤ人は、神を永遠で至高な何者かで、変化することもなければ消滅することもないとみなしている。従って、彼らは町や神殿の中に像を建てることを認めない。」普遍的な存在は、それより下位の全存在が定めた法への服従を否定するという、否定的表現法で表現したり、規定したりできるのである。従って、この曖昧な表現ができなくなると、偶像崇拜や擬人法が始まることになる。神とは、ルカーヌスは言う、

何を見ても、どんな動きをしても、
それは神聖で、最高である。

ある狂信者が特別な「神意」と名付けた教義がある。悪を懲らしめ善に報いることに介入する「宇宙」の機能を普段導いている存在より、その神意は上位にあり優れた力を持っているという。この教義は、イエス・キリストによってはっきりと否定されている。復讐というばかげた忌まわしい教義は、この偉大な倫理家によってあらゆる面から徹底的に否定され、蔑まれてきたようである。また、人間の本性に付随する最も卑しく蔑むべき性癖を、最も尊敬すべき名の者が認めていると曲解されることを、キリストは許さなかった。「あなたの敵を愛しなさい。

あなたを呪う者に祝福を与えなさい、天なる父の子となるために。そのお方は善にも悪にも太陽を照らし、正義にも不正にも雨を降らせる。」⁵⁾この義なる言葉をやさしく柔和に語る人に対して、そして、その教義と生涯で辿った道すべてが慈愛と忍耐と憐れみに満ち溢れている人に対して、詐欺師たちは、なんと恐ろしい誹謗を無理矢理行うことか。彼らはイエスが次のように語ったと言う。全能なる神、あの慈悲深く慈愛に満ちた力は、美しい地上に幸福と安らぎの全要素を等しく振りまき、その影響力は、及ぶ範囲に入ることが許されたすべての生き物に及ぶと。また、全能なる神は、心弱き者、心悪しき者にも、あずかることのできるあらゆる恵みを送ると。このような神が、肉体がいったん滅んだ後に、その肉体が終わりのない拷問に晒され生きることになる計画を立てたと言うのだ。

イエスは、悪人が耐えるべき苦痛の喩えとして、縛られたまま火の中で腱の一筋一筋、骨の一本一本が生きながらに焼き尽くされる責め苦を挙げたと、言われている。⁶⁾そして、こうしたことがなされる根拠として、責め苦を受けた人の性質が道徳的に改善されるという仮説（この仮説は十分に忌まわしいものである）があるわけではない。行うことが正しいから行われているだけである。私の隣人、下僕、あるいは子供が私を傷つけた場合、その報いとして傷つけることは正しいとされている。このような教義に反対することこそ、イエス・キリストが渾身の力を込めて説得したことである。あなたの敵を愛し、あなたを呪う者に祝福を与えなさい。あなたを憎む者に善をなし、悪意に満ちた扱いや迫害をあなたにする者のために祈りなさい。⁷⁾——キリストによれば、これこそ神の行いであり、あなたが神の子であろうとするなら、まことに見習うべきことである。イエス・キリストは、寛容で慈愛にあふれ憐れみ深いものの喩えとして、引き合いに出さなかった存在がある。その存在とは、多くの人類を言い尽くせないほど激しく、茫漠と長いあいだ拷問にかけようとするを意図的に企み……苦痛の本質を知りながら、来るべき善に何の見通しもないまま、人類を拷問にかけようとする……単に、それが正しいことだからという理由で。正しいのはそんなことではなく、次のことである。それぞれの場合に応じてあらゆる状況や結果を考慮に入れて、どのような行動をとれば、最大かつ最高に純粋な幸福をもたらすことができるかを考えること、これこそが正しいことであり、他に正義はあり得ない。正義と慈悲の区別は、暴君の宮廷で最初に考え出された。奴隷となり支配者の略奪にさらされた人類は、宮廷の恩恵または寵愛のおかげで、あらゆる暴虐を軽減してもらうのである。ジュリアス・シーザーの慈悲とは次のようなものであった。彼は一連の陰謀と流血の結果、自国の自由を滅亡させることに成功し、ローマの高貴な人々を殺したり拷問にかけられる権力を持ちながら、血に飢えた自分の心をおし鎮めたので、慈悲深いという名声を得たのである。さらに、もし彼が行っていれば、それまでの彼の恐ろしい所業にさらに残忍な汚点を加えるだけの行動を慎んだため、あたかもそれが彼の長所であるかのように語られたのである。彼を暗殺した者たちの方が、はるかに正義を理解していた。彼らは、最も美德に満ちた文明社会を、一人の極悪人が傍若無人に支配する様を目にした。それで、彼らはシーザーを殺した。同胞の

自由を奪う者を滅ぼしたのである。それはシーザーを憎んでいたからでもなく、一旦は支持した過ちに対し復讐するためでもなかった。ブルータスはシーザーの最も親しい友人であったと言われている。ほとんどの陰謀者たちは、のちに亡きものにする人物と親しく交際していた。彼らがシーザーを滅ぼしたのは愛情からである。その愛情とは、国家、自由、美徳の名の下、人間の精神にとって尊ぶべき、いとおいしいすべてのものに対するやみがたい愛情であった。この聖人のような愛国者たちが自分たちの父であり友人である人物を殺したのは、真摯かつ厳粛で、また不承不承の気持ちからであった。もし、シーザーが持っていた権力を他の者にも分け与えていれば、非業の死をとげることはなかったであろう。利己的で狭量な性格が、愛国者たちに生贄を奉げさせたのである。不摂生と流血沙汰によってシーザーの思索の最深部まで絡みついた悪癖を、彼らはすべて改めることを望んだ。また、シーザーが持つことで腐敗し価値がなくなっていた特権を、彼らや国家と分かち合っただけで欲しかった。シーザーのために犠牲になってもいいと思えたら、愛国者たちは自らの命を犠牲にしたであろう。——こうした心情こそが、世界を支配する「力」に備わっていると、イエス・キリストは主張するのである。彼が望むのは罪人の死ではなく、正義と不正との両方に日の光を当てることである。⁸⁾

狡猾で悪意に満ちた性質の精神は、本来的に幸福とは相容れないものであり、その精神は恵み深い「神」の影響圏内に近づくことができない。ひねくれた性質の精神が受け取ることを許されているものは、神がその精神の上にたっぷり注ぐものだけである。もし幸福というものにわずかでも超過配分があり、事物の性質に矛盾することなく、その超過分が極悪の犯罪者に分配できるものであれば、常に見ている善の力によって、それはきちんと彼の分け前となる。あらゆる場合において、人間の精神は、享受できる限りの楽しみを享受する。イエス・キリストによると、神は「力」であり、その「力」から、またはその「力」を通じて、素晴らしきものや喜ばしきものが流れ出すのである。そうしたものが通り過ぎるとき、その力は、渾然としたこの世界のすべての要素を、本来備わっていた最も純粋で完全な形へと造り直すのである。イエス・キリストは、この力を「意志」の機能に属すると言う。この教義が、一般的な意味においてどの程度哲学的に真理であるか、また、分かりやすい比喩を、イエス・キリストがどの程度意識して用いたか、などはここで扱う本題とは無関係であろう。ただこれだけは明らかである。つまり、イエス・キリストにとっての「神」は、すべての善の源泉であり、苦痛と邪悪の永遠の敵対者であり、そしてこの物質界に健全に作用する不変の動因である。この原因であるものが人間の意志に似たなんらかの原理によって行動へと駆り立てられるという仮説は、その原因には善なる本性が備わっており、わずかな苦痛も人に与えないという説に重みを持たせる。イエス・キリストによれば、そしてまた明らかな現実を見れば、ある邪悪な「精神」がこの不完全な世界の支配権を握っている。しかし、人間の精神にのみ、恵み深い力の影響力が訪れる日がやって来るだろう。人は死に、その亡骸は土の下で朽ち果てる。知識や感情が流れ出したり、あるいは知識や感情を産み出すすべての器官は、違う形のものになり、以前の傾向と

はまったくかけ離れた目的に奉仕するようになる。長い間、私たちを取り巻いてきた、私たちに似た多くの存在を、見たり聞いたりすることも、見られたり聞かれたりすることもなくなる時がやってくる。——それらの存在は墓へと行くだろう。そこには、仕事も、工夫も、知識も、知恵もない。感覚のない塵の山へと、⁹⁾ 私たちと同じように生まれては消えてゆく虫けらへと、私たちは朽ちていくようである。こうした現象に人は惑わされて、陰鬱で冷たい想像力が思考は停止するという概念を産み出していると、イエス・キリストは主張する。

存在の完全な消滅とは別の、もっと包括的な存在状態が、私たちが死と呼ぶ神秘的な変化に続くであろう。惨めさも、苦しみも、恐れもなくなる。「悪霊」の帝国が、墓の領域を越えて延びることはない。あらゆる善の炎の泉から放たれる鮮やかな光は、神秘的で理解し難いものすべてを照らし出し、ついにはあらゆる思考能力を用いて行われる知識や幸福の相互伝達が、常に変化しつつも決して終わらない善の調和を作り出すようになる。これが「天国」であり、その時、苦しみや悪は消滅し、束縛も支配もない慈悲深い原理が、力を一杯にためて宇宙の物事の枠組みを訪れる。実態のない悪とつかの間の希望に満ちた人生は、かすかな彩りの痕跡も残さず夜明け前に去ってゆく夢のようである。純粹なものや神聖なものを内包するあらゆるものは、最も穏やかな受動的な心に訪れる。最も神聖なものとは、仲間がいることを大切に、ありがたいと思える愛情である。愛情が呼び起こす愛の甘美な記憶や希望の実現は、この世という人生の眠りから覚める時、最も威厳がある美しいヴィジョンの預言の成就となるのである。

イエス・キリストは言う。私たちが死んで、病気のけだるさから目覚めた時、「楽園」の栄光と幸福が私たちを取り囲む。あらゆる悪や苦しみは永遠に消滅し……私たちの幸福は、存在の本質、つまり私たちの存在の中で最も素晴らしいものの本質と符合するように修正される。私たちは「神」を見て、彼が善であることを理解する。それが本当にありえなくても、なんと楽しい光景か！この大胆な理論は、じっくり考えてみると、たとえ最も崇高で神聖な詩人の想像に過ぎなくても、なんと壮大で輝かしい概念に見えることか。その詩人は、自らの本性の美しさや威厳に感銘を受けて、この不完全な人生や暗い墓が、憂鬱な分け前として永遠に彼にあてがっている狭い範囲に、耐えられず不満を感じている。

「地獄」や罰は、この大胆な心が生み出した概念であったと、信じてはいけない。感動的に美しく構成された絵の最も目立つ部分、つまり、あらゆる人間の希望の成就や、この世のあらゆる恐怖や苦悩の消滅などは、何百万という感受性豊かな人たちが、神の復讐が考え出した様々な拷問、永遠の苦悩を耐えることで成り立っていると、信じてはいけない。

長年人類を奴隷状態にしてきた盲目的な恐怖と悪意に満ちた迷信について、イエス・キリストは熱弁をふるい攻撃した。国家は、互いを荒廃させ、人民を苦しめ、政権を奪うために、最も巧妙な心の仕組みを利用することで、興亡を繰り返してきた。偉大な人類の共同体は、何千という国に分かれて、お互いを滅ぼすことに躍起となった。この巨大な仕掛けの歯車の奥底には、休みなく荒廃をもたらそうとする精神が潜んでいた。この精神のうちで最も顕著な例は、

復讐である。苦しみを受けたら、苦しみを返すべきだと言う。暴力によって加えられた苦痛の治療方法は、報復しかありえない。というのは、報復することで加害者に自分の行為の本当の意味を教えることができ、二度とさせないための警告にもなるからである。さらに、被った苦しみと同程度の苦しみを返してはならない。ある人が私からある額の金を借りたのなら、その額の金を返してもらえばよい。しかし、私の名を汚し私の領土を荒らした敵からも、同じだけしか要求できないのだろうか。その敵が与えた損失を十倍にして返すことが正しい。そうすることで、相手は自らの行為の当然の結果を決して忘れることがなく、また他の人たちも、人間社会の平和を乱すことの危険をきちんと実感できるのである。こうした論理や、そこから湧き起こる激しい感情が、国家間、家族間、個人間の対立を生んできたのである。例えば、アジア系ギリシア人の自由を擁護しようと集結したイオニア軍の中のアテネ人兵士たちが、たまたまサルディスの町に火をつけてしまった。燃えやすい素材でできた町は跡形もなく焼け落ちてしまった。ペルシャは、このような攻撃を受けたからには、アテネに報復して然るべきだと考えた。ペルシャは大遠征軍を次々に送り込んだ。東方諸国も一致団結してギリシア都市国家を攻撃した。アテネは焼け落ち、領土はすべて廃墟と化し、虫一匹に至るまで死に絶えた。市場も、神殿の彫像や柱も、宝物も（空白）計り知れない損害を与えたり受けたりした後、ペルシャは力尽きるまで報復から手を引かなかった。ペルシャの攻撃に対する復讐心は、ギリシア人の心に根付き、人間が作ったどの国家にもなかったあの輝かしい自由の精神が消えた後も、燃え続けた。そして、アレクサンダー大王が、復讐を遂げるべく登場したのである。この虚しい破壊の達成のために加えられた危害は、あまりにも甚大で悲惨で筆舌に尽くしがたいものであった。死と苦悩を産み出す武器の製造や、攻撃および防御の作戦、軍隊の召集、圧政と欺瞞の術策の考案に費やされた思考のすべて、こうしたものがなければ、民衆が互いに殺し合うようにと騙され駆りたてられ、導かれ支配されることもなかった。すべての思考が、人間の本当の幸福を推し進め、真の人間の帝国を拡大することに用いられていたなら、現在の人間社会はどれほど違っていただろう。人類の幸福や力の本当の源である物理学や道徳の知識が、どれほど進んでいたことだろう！ マルドニウスとクセルクセスがアッティカを滅ぼしたことや、アレクサンダー大王が、自国のマケドニアが災難に遭っていないにもかかわらず、ペルシャ帝国を壊滅させたことを、どんな国が手本とするのか。アレクサンダー大王が略奪の際に用いた口実は、ペルシャから直接教えてもらったものではなかったのか。このような復讐を繰り返すことで、この世に溢れる悪と悪事を減らすどころか、増やしただけではなかったのか。

復讐が虚しく愚かしいことは、参考にできるどの例を見ても明らかである。イエス・キリストだけでなく、どのような主義の哲学でも著名な学者は、理を尽くしてこの無益な迷信を非難してきた。法とは、ある見方をすれば、この嘆かわしい過ちが過剰になることを抑制する試みと解釈することができる。というのは、法は個人が受けた被害に対して罰を与えることを明記しているが、個人が報復を正当化する権利については否定しているからである。確かに、法が

報復を止めさせようとしても、その傾向を多少は認めなければ、過剰な報復の抑制という目的は達成されないだろう。しかし、法が認める唯一の原則は、直接損害を与えることは極力避けて、最大の善を結果として生み出すことである。また、どんな悪い事をした者であれ、人間である以上、拷問や死が直接苦痛を味わわせるだけに終わるなら、そんなやり方は違法であると見なす。以上のことが、唯一正当化できる原則であり、他に法の真の存在理由はない。

* * * * *

復讐を積み重ねるといふ忌まわしい遺産を、人類は子から孫へと伝え、義務感さえもって同胞の悲劇を追い求めてきた。そのため、普遍的な原因にも自分たちに似た性質を持たせるようにしてきた。この目に見えない神秘的な存在の姿は、多少なりとも素晴らしく完璧なものであり、その姿を思い描く人間の心がどれだけ完璧かに応じて、その原型又は対象に似てくる。それゆえ、道徳の面で進歩を極めた国家は、自分たちの神を最も純粋に信仰するだろう。このような国家では、神の本当の属性を知ることこそ、真の宗教の揺るぎない基礎であると考えてきた。各個人が何をどう信じるかということは、各個人が何を善と考えるかに左右されるだろう。ゆえに、国民や個人が広く信仰する神についてどんな概念を抱いているかは、その人たちの行動や意見から、又はその人たちが是認する周囲の者の行動や意見から推測できる。イエス・キリストは、天にまします父が完璧であるのと同様に、弟子たちにも完璧であれと諭し、¹⁰⁾ 同時に人間が完璧であるためには、どんな形であれ、いっさいの復讐や仕返しをやめなければならないと明言した。このように、人間と神の完璧さは同じであるべきと言える。即ち、人は神に似ようとすることで、自分の性質を最も正確に完成することができる。神は、完成された人間の構成要素をすべて、それ自身の中に内包しているからである。ゆえに、神は人間がどれだけ優れているかを測る基準となるし、逆に、観念上の完璧な人間とは、事実上の神の完璧な姿ということになる。神は悪事や復讐をしないことで人間への模範となっているのに、その神が人間の死後にも苦悩を課すなどという明らかに矛盾した考えに、イエス・キリストほどの広い視野を持つ人が陥るとはとても信じられない。報復が第三者にも加害者本人にも見せしめにならないとなると、報復を正当化するためのすべての議論は、説得力を失う。このような理屈がいかに薄弱なものかは既に見てきた通りである。しかしながら、悪魔の性格というものは、人間に感情を授けた上で、不毛な苦悩を与えるものである。神が罪人に地獄の責め苦を永遠に与えるという概念に付随する特異な状況は、そのこと自体が考え得る最大の犯罪の完璧な実例になることである。イエス・キリストは、神をすべての善の本質、すべての幸福の源として、生きとし生けるものの賢明で善意に満ちた創造者、且つ保護者として表現した。しかし、キリストの教義を解釈した者たちは、善の原理と悪の原理を混同してしまった。彼らは、この二つの普遍的な原理が渾然一体となってこの世に現れるのを見て、すべてのものを生み出す力の前にただただ恐れおののいて、暴君の手先に使うようなおべっかを神に浴びせかけた。しかも、彼らは、恩恵も災難も区別なくもたらすと感じているエネルギーから、愛や知恵が生じると考えた。

——どの神学者も常に善と悪の違いを混同していたが、イエス・キリストはその違いをはっきりと示した。彼の教義や後の解釈がいかにも正しくても、真の美德を実行するための手本や動機を用意しなければ、検討する価値すらなくなってしまう。なぜなら、一方では様々な卑劣で残酷な悪事を認め、言い訳も用意しているからである。

イエス・キリストはどの程度自分の教義を聴衆たちの意見に順応させたのか、また彼が語ったと言われている事のうちの程度本当に彼が語ったのか、正確に確かめることはできない。彼は自分自身についての文章記録を残していないので、私たちは彼の伝記作者、教養のない無分別な心の持ち主たちが、後世の人々に伝える不完全で曖昧な情報から判断せざるを得ない。こうした作者たちが我々の唯一の案内人であるが、イエス・キリストが語ったとされる内容に、作者たちの間で明らかな矛盾がある。——作者たちは、彼を心が狭くて迷信深い人物、あるいは復讐心に燃え悪意に満ちた人物として表現している。——作者たちは、イエス・キリストの熱のこもった言葉や最も賢明な説教の中に、驚くほど露骨でたわいのない愚かな意見を書き入れている。しかし、こうした年代記作者たちが、伝承の隙間を満たしたり、素朴な真実を歪めるために作った話と、単純に驚いただけの本当の話とを区別することは、それほど難しいことではない。彼らは、イエス・キリストの本当の人物像をはっきり示すものをきちんと残しており、自分たちの無知や熱狂によって、彼に汚名が着せられることが絶対ないようにしている。私たちは、彼が压制や虚偽を嫌う人であり、また彼が公平な正義の擁護者であり、さらにどれほど表面的に正しい行為であっても、流血や虚偽を伴うものは一切認めていないことを見つけ出す。私たちは、彼が温和で威厳のある態度の持ち主で、危険の中にあっても平静で、自然で純朴な思想と習慣の持ち主で、彼の信奉者たちに愛され崇拜されるまでになり、冷静かつ厚手で、穏やかな人物であったことを見つけ出す。そのため、次のようなことをイエスが言ったとはまったく信じられない。もしあなたが敵を憎むならば、善をもって悪に報いることが得策だと気づくだろう、なぜなら一時的に復讐を忘れ、悪に対して善をなすことで相手を恥じ入らせるからである。¹¹⁾ このような矛盾が生じる場所では、彼が持っていると言われる概して無邪気な態度や幅広い見解によって、ある都合のいい説明が正しいことになってしまう。——

世界の革命において、人目を引く役割を演じる人物の言葉や行動、その生涯に関して判断を行うときに、採用される評価の規則は、狭いものであってはならない。私たちはその人の性格や教義について大まかな概念を形成し、その全体に、様々な行為や言葉をそれぞれ当てはめて考えるべきである。イエス・キリストのシステムに関して、異なった感情や情報を通じて広がることで教義の間に矛盾が生じたり、広大で深遠なために多様で曖昧になってゆく思想体系が公表される度に教義間に矛盾が生じることなど、あってはならないと言っているわけではない。人が憤り、悪徳や愚かさを非難するときに、その人の穏やかな性格の限界を越えて、突き進むことなどないと言っているわけでもない。彼の本当の伝記から逸脱した話は、矛盾することで彼自身の本当の性格が表現できれば、正当化される。あらゆる人の心に、バイコン脚が「洞

窟の偶像」と呼ぶところの、思想の奥深い洞窟に住む奇妙な概念が宿る。これらの概念はあらゆる人間の本質的かつ特有の性格を構成するものであり、各個人のすべての行動や言葉と密接な関係を持っており、ある性格を描写する場合、その人の固有の性格に基づいて、その人の言葉や行動の真意や意味も解釈されるべきなのである。(シェリーによる注、ベーコン、『ノーヴム・オルガヌム』、「アフォリズム」、53、——『科学の威厳と進歩について』、第5巻、第4章。)

いかなる狂信者も美德の敵対者も、この世で価値あるすべてのものの最も勇ましい擁護者や偉大な天才について、勝手に偽り伝えることはできない。そんな者の話でも、信用してもらうためにはいくらかの真実を含んでいなければならない。そのため、その真実が後に、その者の偏見や偽りを十分に暴き出すことになる。

これらの伝記作者たちが述べる奇跡に関しては、私はすでに奇跡の性質あるいは存在に関するいかなる議論も拒否してきた。奇跡の虚偽性あるいは真実性についての仮説は、どのようなものであっても、描こうとする絵の色合いを変えるものではない。ソクラテスの道徳的、哲学的性質をきちんと判断するために、彼に仕える懇意な「精霊」の存在を信じていた問題について判断を下す必要はない。目に見えない世界との交わりや支配に関する人間の心の力は、確かに興味ある議論のテーマであるが、私が今この原稿を書いている国の国家宗教とイエス・キリストの場合とを関連づけることは、新しい神々を導入したり、古い神々を捨て去ったりすることに対する非難に、筆者自身をさらす危険がある。また、お互い耐える事が義務であるということが十分に理解されていないために、形而上学者と道德家が、注意してアスクレピオス¹²⁾に生贄のおんどりを捧げたにもかかわらず、その報酬として一杯の毒人参のようなものを受け取ることになってしまう危険がある。

しかしながら、伝記作者たちが主張している多くの事が、イエス・キリストのシステムの全体的な精神と矛盾する結論に導かれてしまうという理由だけで、それらが認められず、拒否されているのではない。イエス・キリストは、世界に大きな影響を及ぼした他の改革者たちが行ったことを実行しただけである。——彼が話しかけた者たちの先入観に、彼の教義が受け入れられやすいように変更した。そのために、彼は私たちに十分理解できる言葉を用いた。彼は言った——私の教義はあなた方にとって耳慣れないもの、あるいは奇妙なものに思えるかもしれないが、実際には、私の教義は単に本来の制度や、あなた方自身の法律や宗教に古くからあった習慣の復元や回復を目指すものである。あなた方の信仰や政策の基本構造は、当初は申し分ないものであった。けれども、腐敗し作り変えられ、やがて墮落していった。私はそれらの本来の権力とすばらしさを復活させたいのだ。「私が法律や予言者たちを滅ぼすためにやって来たなどと考えないように。私は滅ぼすためにやって来たのではなく、成就するためにやって来たのだ。「天」と「地」が消えるまで、すべてが遂行されるまで、わずかたりとも法律が顧みられなくなることは決してないであろう。」¹³⁾——かくして熟練した雄弁家のように、彼は自分の

聴衆の先入観に取り入り、彼らの気持ちに共感を示すことで、聴衆は喜んで彼の説教を受け入れた。(シェリーによる注、キケロの『弁論家について』を見よ。) 説得の技術は、論理的思考の技術とは異なる。真の目的の達成にとって重要なことは、その真価を判断できる人々を、国家宗教への偏愛から解放することである。その偏愛が大衆を耳も聞こえず目も見えない状態にしているからである。この方法を価値なき策略と思ってはならない。人間は理性の権威だけ認めればいいという考えは、理性にとって一番いいかもしれないが、理性の権威を認めさせるためには、人々が崇拜し慣れ親しんできた制度を邪魔者扱いしないことも、ある程度大切である。改革者たちは皆、自分自身の本当の感情や意見を偽って伝えることを強制されてきた。人の心に浮かび表現を決定するはずの正確で厳密なイメージではなく、わずかとはいえ、偽装や見せかけ、あるいは偽善や誇張などが混ざった言葉が、人の口から出てくることは非常に悲しいことである。しかし、他者に対してあくまで誠実であろうとしても、自分自身の心に対して誠実でなければ、良い結果をもたらすことはできない。実際、真理は気づかれるまで、伝えることはできないのである。それゆえ、聴衆に真理への関心を起こさせるには、聴衆の中に、雄弁家の説教を十分に考え吟味する心の状態を作り出すことが必要である。

この好ましい心の状態を作り出し、イエス・キリストはユダヤ人の法制度を制限し、ついには廃止させようとした。ユダヤ人の法は道徳行為に関する規則であると公言されているが、そう公言するには不十分なものであることを、イエス・キリストは詳しく述べた。(シェリーによる注、「マタイによる福音書」、5章、21、27、31、33節を見よ。) そして、ユダヤ人の法制度の不合理的で不道徳な例として、仕返しを法律を無条件に選んだ。(シェリーによる注、「マタイによる福音書」、5章、38節。) その説教の結論は、(空白) 非常に大胆で熱のこもった考察の口調となっている。イエス・キリストは、大衆へ自説の正しさを証明できたことで大胆になり、自分の信仰の特異な点を公にしたと考えられる。イエス・キリストは、一般に受け入れられている意見や大切にされている贅沢品や人間の迷信を、すべて踏みじった。イエス・キリストは、人々が幼児の頃から取り囲まれている習慣や、盲目的な信仰の鎖を解き放ち、そして「宇宙の神」を模倣したり、仕えたりするように命じた。

人類の平等

主の御霊が私に宿っている。なぜなら、貧しい人々に福音を述べ伝えさせるために私を聖別してくださったからである。また、失意の者を癒し、囚人の解放を説き、盲人の目が開かれることを告げ、打ちひしがれた者に自由をもたらすために、主は私をつかわした。(「ルカによる福音書」、4章、18節。)

これはプラトンやディオゲネスが人類の平等について熟考したことすべての表明である。少数の者に贅沢を許し、少数の者の権力への渇きを癒してやるために、大多数の者は惨めな無知状態、道徳的低能の状況に後退させられたと、哲学者たちは考えた。邪悪な心に打ち勝ったり、

物質的世界の困難さを克服したりするには、あまりに卑しい精神や薄弱な意志しか人間は持っていないために、本能が求める明白な威厳や権力の安易な入手方法として、人間は同胞に対する支配権を追い求めた。プラトンは共和国の構想を書いた。その中では、不平等な権力を実行する手段が平等に分配されているかを、法が監視している。名誉、富、そして（空白）。ディオゲネスは、奴隷と暴君の制度に対して、もっと高尚で価値ある制度を考案した。彼は言う、人類の不満の種である不平等をなくすものは、各個人の力の中にあると。人が道徳的存在として占めている立場や自らの価値を、人に気づかせなさい。ダイヤモンドや黄金、宮殿や王笏の価値は、人類の意見に基づいている。このような大手を振る不正のシンボル、危害や詐欺の道具の、使用や製造に課せらる贅沢規制法こそが、人類の意見に基づいた法である。このように、すべての人は、自らのために法を制定する力を持っている。自分の持つ価値や道徳的尊厳を、各個人に気づかせなさい。きらびやかな衣装、贅沢な食事、大勢のおべっか使いや奴隷を抱えることに、人が何の敬意も払わない限り、より賢く価値あるものに（空白）従わせなさい。お、人類よ、あなたたちは富や社会的権力の虚飾の虜となり、それらに価値を認め、追い求めている。物欲を減らし、食べるものと住む所に関しては、森の動物や空の鳥のように生きることを学びなさい。¹⁴⁾ そうすれば、他の人たちが贅沢病や圧制の害悪に冒されていると、不平をもち必要もなくなるだろう。真に賢い者がいれば、思想や感情のみならず、外面的な所有においても完全な共同体ができるだろう。それゆえ、あなたたちが互いに愛し合う限りは、文明的な生活の発明品によってもたらされるすべての利益を享受する共同体で暮らすことができる。その発明品は、精神的な豊かさのために使われるときだけ価値があり、哲学と人類の利益のために共有され適用されるときだけ価値を持つ。人々の間に愛がなければ、どんな制度を作っても、今までと同じ目的、つまり不平等の継続に役立つだけである。——人々の間に愛がなければ、自分の仕事に空虚感を抱く者は、その社会から飛び出し、自分の魂だけで満足すればいい。知恵の中にいれば、何も失うことはなく、平和の中にいれば、すべてを得る。人々の間に存在する愛の量に比例して、富と権力の共同体も変わってくる。真実の友人たちの中では、すべてが共有される。無知や嫉妬、迷信が世界から消え去れば、全人類は友となるだろう。唯一で完全な本物の共和国は、生けるすべての者を包み込む社会である。国や都市、家族や宗教の中にわざと作った差異は、人々が盲目的に同胞に対して抱く憎悪と侮蔑を表す一般的な名前に過ぎない。私は自分の国を愛している。私が生まれた町、両親、妻、子供たちを愛している。この町に、この女性やこの国に、役立つ事を力の及ぶ限りすることが私の義務となっている。——だが、なぜこうした区別をするのだろうか。人間性があなたに強要する義務を、間接的に拒絶するためか。どんな名称の人であっても、すべての人に対して、あなたの力が及ぶ限りあらゆる善をなすことを、人間性は義務として課している。あなたは全人類を、いや、すべての個人を愛すべきである。身内の人をあまり愛さないのではなく、他の人々をもっと愛すべきなのである。一旦、愛情と自信の感情が行き渡れば、富と権力の区別は消えるだろう。さもなけ

れば、人類に同じように害となるものが取って代わるだけで、それらが廃止されることはないだろう。全人類が権利を有する完全な共同体ができあがるまでは。——しかし、夜の帳がかすかな夜明けの光に追い払われるように、善意の感情のわずかな前進が、少しずつ、お互い疑念と憎悪を抱く暴君と奴隷たちの闇を消し去ってゆくだろう。

あなた方の肉体的な欲求の種類は少ないが、精神や心の欲求は、その種類の多さや複雑さのせいで、数値や形で表すことができない。前者の欲求を満たすため、人々は互いを奴隷としてきた。この欲求を満たすことに関係のないものは、すべて価値がなく望ましくないと判断するほどに、人々はこうした低俗な欲求を追い求めてきた。こうして、本来あったはずの目的を見失った欲情の体系ができあがった。名声、権力、黄金が、それ自体価値あるものとなり、盲目的に日常的な偶像崇拜の対象となった。帝国という見世物や、無敵の力を持つという名声、なぜ価値あるものと見なすようになったのか、その特性についてふり返ることもなく、所有者たちは無意味な自己満足で見つめるのである。人間性の中で最も軽蔑すべき特性を伸ばすことで、不和や無関心や（空白）、道徳的世界に混乱をもたらし、本質的に依存している。こうしたものが、人間社会を結びつける絆である限り、それらがもろいものだと思わせてはならない。人が自由で平等で真に賢くなるためには、鎖につながれた習慣や迷信を脱ぎ捨てなくてはならない。人は、好色からその虚飾を、わがままからその言い訳をはぎ取り、行動や対象があるがままに見つめなくてはならない。そうすれば、普遍的な愛の知恵を発見することができる。自分の肉体的欲望を満たすために同胞の時間や自由を犠牲にしたり、自分の性的欲望を満たすために同胞を墮落させたりすることの卑しさや不当さを感じ取れるようになる。人は、「余計な飾りは悪であり、真の共和国は理想の美を持つものである」と思うようになる。

イエス・キリストの教義は、それが広まった時代や社会の状態によって違いはあるけれど、以上のようなものであった。公正で思いやりのある人が、人間の社会性について考えた上で説く教義は、このようなものであったと言える。人間の平等に関する教義は、世界の様々な時代に様々な成功を収め支持されてきた。完全には理解されなかったが、その教義の正しさゆえに、古代ギリシアやローマの慣習に、直感的なものであるがかなりの影響を与えた。この教義に基づく習慣を確立しようとする試みが、近代ヨーロッパにおいて文学と諸芸の復興以来、いくつかの実例を伴い行われてきた。ルソーは、誠実で熱心な信仰を持つ雄弁家で、この見解を支持した。おそらく彼は、その感情と理解の構造において、ユダヤの神秘的な賢者に最もよく似た現代の哲学者である。イエス・キリストが人間の臆病さと肉体的欲望を非難する時の熱情的な言葉を読むとき、さらに一貫してつながりのあるルソーの情熱的な言葉を思い出してしまう。イエス・キリストは言う、「誰も二人の主人に仕えることは出来ない

* * * * *

だから明日のことを思い煩うな。明日は明日のことを考えるだけで十分である。今日の災いは今日だけで十分である。」——もし私たちが、ある崇高で詩的な精神に教えを受けたいと思

うなら、教えの中で用いられたすべての表現を文字通りに解釈するという馬鹿げた過ちを犯すことのないようにすべきである。イエス・キリストが使う表現を厳密に文字通りに解釈しようとするほど、又は、自然科学やその他の学問の成果を捨て、自然が生み出すものだけを頼りに生きてゆくのが一番だと言うことほど、真理からかけ離れたことはない。不平等を改善する方法は、野蛮人や獣たちの状態に戻ることでと言うのは、明らかな間違いである。哲学という神秘的な学問に臨むとき、その普遍性に対して偏狭な考えで臨むと、決して理解できない。ルソーは、¹⁵⁾ 自国の多くの人々に対して、あらゆる生活の術を捨て、すべての家や神殿を破壊し、森の住民になれば、論すつもりは決してなかった。彼は、同国人の中で最も啓蒙された者たちに呼びかけ、文明社会が肉体的欲望や利己主義の悪徳の影に覆われていて、悲惨で病的な様相を呈していることを強く訴え、彼らに純粋で素朴な生き方の模範を示してくれるようにと説得した。同様に、イエス・キリストがエルサレムの住民たちを説得して、自分たちの畑を耕さず、屋根のついた小屋を作らず、また、明日のための食料も残さないように言ったとは考えられない。彼はただ、すべてのものを人間の物質的な枠組みを維持するための道具に変えてしまう制度の悲惨さと害悪を暴こうとして、情熱的な愛の言葉で、全人類に語りかけたのだ。誰も、神とマモンという二人の主人に仕えることはできないと警告した。¹⁶⁾ つまり、高貴な心を持ち、正義感に溢れ、賢くあると同時に、人間社会の慣わしに追従し、習慣への盲目的崇拜から、又は肉体的な満足を得る直接的手段として、名誉や富や帝国を求めることは、両立しないのである。服装や食べ物や住まいは、皆が考えるような人間生活の真の目的ではなく、単に、真の目的の達成にどれほど役立つかに応じて価値が認められる手段に過ぎないと教えている。その手段を平等に所有する権利を、すべての人は持っている。この点に関して、空を飛ぶ鳥や野の百合は、人間が模倣すべき喩えとなっている。彼らは、「普遍的な神」によって衣服を与えられ、食物を与えられている。だからあなたも、善の精神があなたの知的な器を訪れることができるようにしなさい。つまり、正しく純真な人になりなさい。自分の肉体がどの程度欲しがるか知れば、それを満たすために、どれほどわずかな労力ですむかを知りましょう。天にいるあなたの父は、あなたが必要とするものを知っている。思想を受け取るあなたの器は、その性質の純粋さと立派さに応じて、「普遍的調和又は理性」の住処となれる。もしあの崇高な状態に達したいと望めば、あなたが生命維持に必要なものをどうやって獲得したらよいか、「普遍的調和又は理性」が教えてくれるでしょう。このように、純粋で幸福になれるようにと、すべての人に靈感が与えられている。自然の恵みを共に分かち合うことが、すべての人に求められている。贅沢や自惚れを尊重する仕組みに関わってはいけない。あなたの人間性を真に高めるための道は、なんとわずかなことか。肉体的な欲求が一番少ない者こそ、神的な性質へ一番近づけるのである。肉体的な欲求を最も手軽な方法で満足させなさい。そして、あなたの残りのエネルギーを、美德と知識の獲得のために用いなさい。とても美しく広大なこの世界のすべてが、あなたの思索の糧となってくれる。あなたに似ており、同じ感情を持つ生き物たちは、

あなたの愛情を育むためのものである。これらが、あなたのものと結びつくことで、あなたが心に抱く最高の希望を実現できる。このように、自分を価値ある者にすることで、想像力によって、空を速く飛ぶきれいな鳥と同じくらい自由に、野に咲く百合の花と同じくらい美しくなれる。

人類が賢くなるにつれて、そう、それに正確に比例して、人の叡智は、現在人々が服従している不平等な制度を廃止することが可能である。政府とは実際、腐敗の印にすぎない。人々は、考えも動機もほとんどないまま、過剰な利己主義と悪徳にふけり、本来愛し合うことで得られる計り知れない利益にほとんど気づかないでいる。帝国支配と服従という目盛りで測ることでしか、人間社会を捉えられなくなっている。前例と慣行に基づく法規が何事もなく廃止されるためには、普遍的な慈悲心に頼る必要がある。しかし、もともとこれらの法規は不正と暴力のシステムを弱体化するために考え出されたのだから、今はそのシステムに依存することで残っている。その法規は、同輩のことを考え決定する権力を人に与えることを認めている。しかし、権力者たちは、自分たちが支配する大衆と同じくらい意志薄弱で無知であるにもかかわらず、権力を与えられたために支配権を持っている。その当然の結果として、彼らは支配権を用いて、自分たち自身も含め、すべての人類の肉体的、精神的、知的本性を歪めている。叡智が目指すべきことは、この権力を支える様々な差別をなくすことである。つまり、権力は必要悪だと言う主張に対し、その必要悪のために生じる様々な差別の無意味さを明らかにすることで、差別をなくすことができる。実際、正義がなされる所では、悪は事実上消滅する。そして、本当の美德が普及するにつれて、それだけ悪は消滅していく。——人間に関わるものはすべて、知らない間に毒に侵される。そのため、人は理解力を失い、モラルが低下し、身体のような器官が病気にかかる。古代の詩人たちの中で最も賢く気高い者は、この真実を見抜き、人類の最初の時代を振り返って、自分たちの価値観を具体的に述べた。サトゥルヌスの治世は平等であったと見る。そして、人々が幸福になり、幸福であり続けることを可能にした美德を失い、次第に墮落していったと教える。詩人たちの説は、哲学的には誤りである。後のもっと正確な観察が教えるように、野蛮人は非常に邪悪で、惨めな人たちであった。さらに、本当の不平等のしるしである暴力と不正が、軽減されることなく野蛮人の社会に満ちていた。もっと幸福な人間社会への詩人たちの想像は、(空白) 時代を実際思い描くことで、落胆と悲しみにくれるだけだった。しかし、詩人は、はかない希望の子供であり、神秘的な未来の預言者、又は産みの親である。人は昔、野獣のようであったが、道德家となり、形而上学者、詩人、天文学者となった。——ルクレチウスやウェルギリウスであれば、人間性の進歩の証拠として、自分たちとスキタイの食人種を比較してもよかったはずである。イエス・キリストは、こうした詩人たちが過去に思い描いたものを未来に思い描いたのである。

現代とイエス・キリストが教えた時代との間で、幾世代にも渡り積まれた経験は、イエスの理論を検証し、詩人たちの理論を例証することに役立つ。昔よりもっと正義が人々の間に行き

渡っている今は、昔よりもっと平等であるべきである。そして、昔よりもっともっと普遍的な知識が行き渡っている今は、昔よりもっと正義がなされるべきである。こうした力強い希望の実現へと、イエス・キリストの考え方は延びていく。こうした傾向が自分の理論にはあると信じていた。つまり、すべての人が互いに抱くようになる愛や、その愛を生み出してくれる真実の知識が、差別の破壊に役立つ限り、人為的な差別の廃止に向かうと信じていた。――

ある若者が、イエス・キリストの不思議な威厳と素朴さに打たれ、彼が話す言葉の力に魅了された。彼はイエスの弟子にしてくれることを求めた。汝の持ち物を全部売らなさい、その哲学者は答えた。すべてを貧しいものに与え、私について来なさい。しかし、その若者は多くの財産を持っていたので、泣きながら去っていった。¹⁷⁾

* * * * *

キリストの死後、弟子たちは平等のシステムを試みた。「信者たちはすべてのものを共有した。彼らは自分の財産や持ち物を売り、それぞれの必要に応じてすべての人に分配した。そして、彼らは毎日心一つにして神殿に参り続け、家から家へとパンを分かち合い、喜んで心一つにして食事をした」（「使徒行伝」、第2章、44節。）正義が軽蔑される社会にあっても、厳格な正義の理論の実践が期待されていた。一時的な情熱の輝きが人々の心から消え去った後、前例と習慣がその帝国を取り戻そうと、大洪水のように押し寄せ、ユートピアは沈んでゆき孤立した。生まれながらに財産を持つ人たちは、贅沢な部屋やご馳走、欺瞞に満ちた威厳を見せびらかす儀式、そうしたものが取り巻く権力の玉座や富の宮廷を、自己満足とともにながめた。――こうしたものを、社会的身分が低くて持てない人たちは、その有害な輝きを愚かなねたみとともに見つめるようになった。そして、人間に本来備わっている威厳を犠牲にしてまで、金持ちの偽物の威厳を欲しがらなくなった。初期のキリスト教共和国の指導者たちは、雄弁さと策略で国民に影響力を持つようになり、高潔な国の理念を見守るふりをしながら、皆の平等な利益を守るために作られた制度を最初に侵害した。こうした指導者たちは巧妙に自分たちの良心の声を黙らせ、この世で徳高く幸福な人生を送ることよりむしろ、死後裕福になることに夢中になった。また、人生を美しく飾り改善する手段を考えることよりむしろ、神とこの世の関係の秘密を調べることに専念した。彼らは、よく知っている物事を説明したり考えたりしようとしなかった。――彼らが築いた平等のシステムは、必然的に地に落ちてしまった。なぜなら、もともと人類の道徳心が向上してから実施すべきであって、道徳心が向上する前に実施すべきでないシステムであったからである。イエス・キリストが唱えるシステムの最初の信奉者たちが財産を共有したことは、どうでもいい枝葉にすぎなかった。実際、彼らと同規模の共同体であれば、それぞれ財産を持っていても、このやり方に頼らずやっつけられる。この共有のやり方は、多額の教会財産を預かる会計係を誘惑して、不正行為に走らせるだけである。大きな共同体に属する人は誰でも、たまたま財産の管理や保管を任されることになったとき、きちんと仕事ができるかどうかはその人の美徳次第である。皆が同意して、ある人の自由裁量に財源

を委ねることになったとき、その人がお金の使い道をきちんと考えるかどうかは、その人の知恵次第である。この世の権力や身分に関する悪しき不平等を撲滅できるかどうかは、このようなことにかかっている。平等を実現していこうとすれば、人類の知恵と美德を少しずつ確実に積み上げていく必要がある。その間、独裁的な制度の下でも、平等な財産権や支配権のシステムを築こうと努力すれば、たとえ不完全なものでも何らかの恩恵は得られる。過去の努力はいずれも、基礎があまりにも不安定だったため、失敗せざるを得なかった。しかし、この不完全な努力の記録を読むとき、真の正義が人々の理解力に訴えかけ、その結果、人々が贅沢の喜びを捨て去り、権力を持てるかどうかで一喜一憂することもなくなり、幾世代にも渡り築いた権威を後生大事にすべきとする迷信を捨てた、そんな時代があったことが分かる。この努力の記録は、真理と正義が、どの程度勝利を収めたかを記すために、敵国に数多く立てられた戦勝記念碑である。

イエス・キリストは言及した、

テキスト

The Prose Works of Percy Bysshe Shelley, vol. I, Ed. E.B. Murray, Clarendon Press, Oxford, 1993.

注

- 1) 『新約聖書』「マタイによる福音書」、27章、45-53節。
- 2) スカエヴォラは古代ローマの政治家一族の名前、デキウス親子は二人ともローマの執政官であった、レグルスはローマの執政官であり将軍であった。
- 3) W. ワーズワースの詩、'Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey' の91-3行目。
- 4) 『新約聖書』「マタイによる福音書」、5章、8節。
- 5) 同、5章、44-5節。
- 6) 同、25章、41節に対するシェリーの拡大解釈。
- 7) 『新約聖書』「ルカによる福音書」、6章、27-8節。
- 8) 『新約聖書』「マタイによる福音書」、5章、45節。
- 9) 『旧約聖書』「伝道の書」、9章、10節。
- 10) 『新約聖書』「マタイによる福音書」、5章、48節。
- 11) 『新約聖書』「ローマの信徒への手紙」、12章、19-21節。
- 12) ギリシャ神話の医学の神。
- 13) 『新約聖書』「マタイによる福音書」、5章、17-8節。
- 14) 『新約聖書』「マタイによる福音書」、6章、25-30節。
- 15) 「自然に帰れ」というルターの根本主張を表す標語を受けている。
- 16) 『新約聖書』「マタイによる福音書」、6章、24節。
- 17) 『新約聖書』「マルコによる福音書」、10章、17-22節。